II 学図 小國202

教育博物館 資料室

文部省検定済教科書
財團法人日本新教育研究会編修

こくご 三

小KC G16

学校図書株式会社発行

教科書文庫
50458
5
810
34-1948
01304
49584

寄贈

教科書文庫
5
810
34-1948
0130449584

昭和二十三年八月十六日文部省検定済

こくご

三

広島大学図書
0130449584

第二学年用上

廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449584

もくろく

一　二年生に　なった　日　四
二　春の　こども　十三
三　あわてどこや　十九
四　はしらの　しるし　二十二
五　おたまじゃくし　二十八
六　かえるの　なく　ころ　三十四
七　ごちそうさま　四十
八　かつおつり　四十二
九　ゆめ　四十四
十　おるすい　四十七
十一　みずあび　五十二
十二　しゃしんかんに　いった　虫たち　五十六
十三　牛　六十四
十四　水でっぽう　六十六
十五　そうだん　六十九
十六　わしの　はなし　七十五
十七　こおろぎ　八十一
十八　いろはがるた　九十二
十九　雨　九十八
二十　どうして　お空へ　百十七

一　二年生に　なった　日

けさ　春男さんは、とくべつに　げんきの　いい　こえで、

「おかあさん、いって　まいります。」

と　いって、学校へ　でかけました。

春男さんは　きょうから　二年生なのです。

たばこやの　かどで、なかよしの　山本くんと　いっしょに　なりました。山本くんも　きょうは　いつもより

にこにこして　いました。

ふたりは、すぐに　あたらしい　よみかたの　本や、さんすうの　本の　はなしを　しあいました。

「あ、あれ　一年生だよ。」

山本くんが　きゅうに、むこうの　方へ　いく　子を　ゆびさしました。

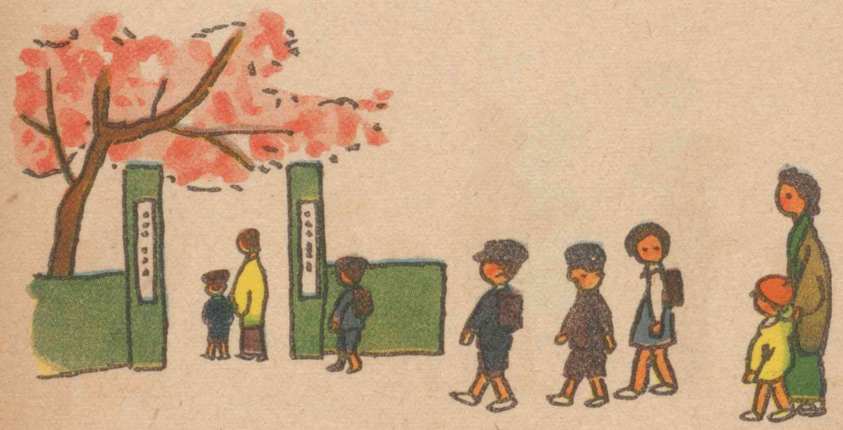
「ずいぶん　小さいんだねえ。おかあさんに　ひっぱられて　いくよ。」

「あ、あの　子もだ。」

「ああ、あっちからも　くるよ。」

学校の　ちかくへ　いくと、おか"
あさんや　おとうさんや　おねえさ"
んに　つれられた　一年生たちが、
あとから　あとから　やって　きま"
した。
げんきよく　あるいて　くるのも
あれば、おかあさんの　手に　つか"
まって　のろのろ　くるのも　あり"
ます。
二年生や　三年生や　上の　きゅ"

うの　せいとに　あうと、どの　子"
も　はずかしそうな、また　えらい"
なあとでも　いうような　かおを
して　みおくります。
その　中を、春男さんは　山本く"
んと　なれた　ようすを　して、さ"
っさと　学校の　もんを　はいって
いきました。なんだか　きゅうに
ずっと　おとなに　なったような
きが　して、うれしくて　たまりま"



せんでした。

まえの　二年生のだった　げたばこで、上ぐつに　はき、かえると、あたらしい　きょうしつへ　はんぶん　かけあしで　いきました。春男さんも　山本くんも　よく　しって　いながら、うっかり　一年生の　きょうしつの　方へ　いきかけました。

「あっ、ちがう。」

おもわず　ふたりは、かおを　みあわせて　わらって　しまいました。

二年生の　きょうしつは　かどの　へやで、うんどうば

が　よく　みえます。まどの　すぐ　そばに　立って　いる　さくらの　木を　みあげると、日の　よく　あたる　方の　えだは、花が　きれいに　さいて　います。

春男さんは、この　大きな　木が　みんな　花ざかりに　なったら、べんきょうを　するのにも　きっと　いい　き　もちだろうと、うれしくなりました。

春男さんは、あたらしい　きょうしつの　あたらしい　せきに　こしかけながら、この　つくえは　だれが　つかって　いたのだろう、ずいぶん　きれいだなと　おもいました。それと　いっしょに、一年生の　ときの　じぶんの

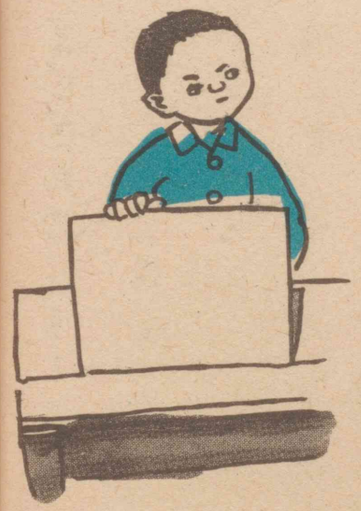
せきには、どんな　子が　すわって
いるだろうかと　おもいました。
春男さんは、二じかんめが　すむ"
と、いそいで　一年生の　きょうし"
つへ　いって、ろうかの　まどから
のぞいて　みました。
先生は　ちょっと　どこかへ　い"
らっしゃったと　みえて、がやがや
がたがたと、それは　それは　にぎ"
やかです。

春男さんは、ろうかの　まどぎわの　うしろから　三れ"
つめの、じぶんの　せきだった　ところを　みました。
そこには、かわいらしい　まるまると　ふとった　子が、
にこにこ　しながら、ふでばこを　つくえの　中から　だ"
したり　しまったり　して　いました。
「きみ、きみ。」
春男さんは、まどから　はんぶん　のりだして　よんで
みました。その　子は　びっくりしたように　春男さんの
方を　みました。
「きみ、その　つくえね、ぼくが　つかってたんだよ。」

ああ　そうかと　いうような　かおを　して、その　子は　だまって　にっこり　しました。

「ぼくね、その　つくえ　だいじに　つかったんだよ。きずなんか　どこにも　つけなかったんだよ」。

その　子は　こっくり　うなずいて、つくえの　上を　なでるように　しながら、春男さんの　かおを　みあげました。



二　春の　こども

えんぴつ

あたらしい　えんぴつを
けずったら、
木の　においが　した。
なにか　かきたくって
たまらない。

じゃん　けん　ぽい

じゃん　けん　ぽい　と　だした。
かみ　だしゃ　おにょ。
じゃん　けん　ぽい　と　だした。
かみ　だしゃ　おにょ。

あの子　いれよよ
石けり　してる。
いつも　わを　かいて
一本足　してる。
ひとりぼっちの
あの子も　いれよ。

さくら

ぼくらが
べんきょう　して　いたら、
すずしい　かぜが
ふいて　きた。
まどの、さくらが
まいこんだ。
先生も　せいとも、
みんな　よろこんだ。

一年生

ふたりで　かえって　いく　一年生。
男の子と　女の子。
なにか　いっしんに
はなして　いる。
ランドセルの　ふたが、
あいて　いるのも
きが　つかないようだ。

ポチ

ポチ　ポチ。
なにが　そんなに
うれしいの。

しっぽ、
そんなに　ふって
きれないの。

三　あわてどこや

春は　はようから　かわべの　あしに、
かにが　みせ　だし、とこやで　ござる。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

小がに　ぶつぶつ　しゃぼんを　とかし、
おやじ　じまんで　はさみを　ならす。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

そこへ　うさぎが　おきゃくに　ござる。
どうぞ　いそいで　かみ　かって　おくれ。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

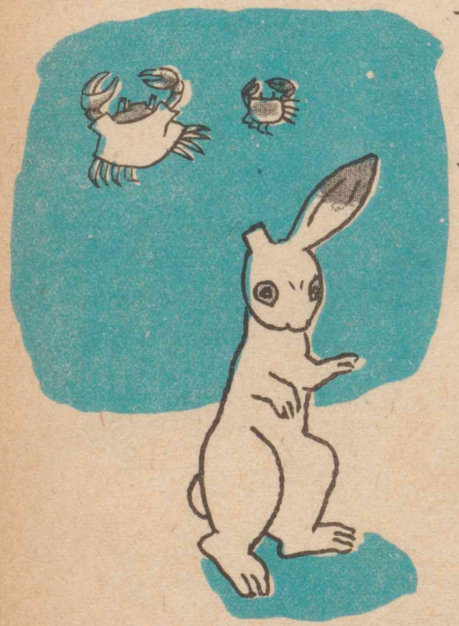
うさぎぁ　きがせく　かにぁ　あわてるし、
はやく　はやくと　きゃくぁ　つめこむし。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

じゃまな　お耳は　ぴょこ　ぴょこ　するし、
そこで　あわてて　チョンと　切りおとす。

チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

うさぎぁ　おこるし　かにぁ　はじょ　かくし、
しかた　なくなく　あなへと　にげる。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

しかた　なくなく
あなへと　にげる。
チョッキン、チョッキン、
チョッキンナ。



四　はしらの　しるし

うちの　おふろばの、いりぐちの　はしらには、いくつも　しるしが　つけて　あります。

しるしは、みんな　わたくしたちの　せいの　高さで、おとうさんが　おつけに　なったのです。

くろと　赤と　青の　三色　あります。

くろは　にいさん、赤は　わたくし、青は　おとうとの　まさおちゃんのです。

一ばん　高い　ところの　は　おとうさんの　で、その　つぎの　は　おかあさんの　です。おかあさんの　は　やっと　手が　とどきますが、おとうさんの　は　せのび　しても　だめです。

きょうも　おふろから　でた　とき、みんな　はかることに　なったので、おふろに　はいると、くびを　のばしたり　あしを　のばしたり　して　おおさわぎです。

はかるのは　おふろから　でた　じゅんです。
一ばん　はじめは　にいさんです。
「うん、だいぶ　のびた。――百二十五センチ。」
と、おとうさんが　おっしゃると、にいさんは、このまえはかった　しるしの　ところから　ゆびで　はかって、
「やあ、こんなに　のびたぞ。こんなに。」
と、大きな　声で　いいました。
「まあ、まあ。」
おかあさんが、手を　ふき

ふき　おかってから　いらっしゃいました。
つぎは　まさおちゃんです。
らいねん　一年生に　なる　まさおちゃんは、いつもとちがう　子みたいに　まじめな　かおを　して、のびあがるように　立ちました。からだじゅうから　白い　ゆげが　いっぱい　でて　います。
「お、百八センチ。――もうすこしで、たろうの　一年生に　なった　ときと　おなじだよ。」
「うわあ、すごい。うわあ、すごい。」
まさおちゃんは　手を　ピシャ　ピシャ　たたきながら

はだかで　そこらを　かけまわり"
ました。
こんどは　わたくしの　ばんで"
す。むねが　どきどき　して　こ"
わいようです。
わたくしが　からだを　ふいて
いると、おとうさんが　わらいな"
がら、

「この　はしらは、うちじゅうで　一ばん　だいじな　は"
しらだよ。」
と　おっしゃいました。
すると、まさおちゃんの　せなかを　ふいて　いた　お"
かあさんも、高い　ところを　みあげて、
「おとうさんの　上に　しるしを　つける　子は、どの
子でしょうね。」
と、やっぱり　にこにこしながら　おっしゃいました。

五　おたまじゃくし

―かんさつ　にっき―

三月　十七日

ぼくが　いけの　中を　みると、かえるが　四ひき、きゃ
もち　よさそうに　およいで　いました。あたたかく　な
ったので、でて　きたのだと　思いました。

三月　十九日

あさ　おきて、いけの　中を　みると、かえるの　たま

ごが　たくさん　うんで　ありました。ぬるぬる　した
かんてんのような　ものが、ほそ長く　かたまって　いま
した。

三月　三十日

かんてんのような　ものの　中に、
黒い　てんてんが　はっきり　みえ
るように　なりました。

四月　二十日

いけの　中を　みると、おたまじゃくしが　たくさん
いました。黒い　たまに、ほそ長く　おが　でました。

五ミリ　ぐらいです。けれども　まだ"
うごきません。ときどき　うごくのも
あります。

四月　三十日

おたまじゃくしが、みんな　およぐ"
ように　なりました。一つの　ところ"
に　かたまって　います。とても　た"
のしそうです。

大きな　かえるは　どこかへ　いっ"
て　しまいました。

五月　十日

おたまじゃくしの　うしろあしが　でました。二センチ
ぐらいに　なりました。

すこし　はなれて　およぐように　なりました。たくさ"
ん　いるので、いけの　水が　黒く　みえます。

五月　十八日

かんに　いれて　かんさつ　しました。おたまじゃくし"
の　ぶきおいが　わるく　なって　きたので、いけの　中"
に　いれて　やりました。おたまじゃくしは　いけの　中"
の　石に　ついて　います。ぼくは、こけを　たべるのか"

なと　思いました。

五月　二十七日

おたまじゃくしの　手が　でました。大きさは　一センチ　ぐらいに　なりました。まえより　小さく　なったのです。

六月　六日

おたまじゃくしの　しっぽが、だんだん　みじかくなって　きて、七ミリ　ぐらいに　なりました。これで　おたまじゃくしは、四十八日　たちました。

六月　十五日

おたまじゃくしが　かえるに　なりました。まだ　ないのも　あります。かえるは　五ミリ　ぐらいの　大きさです。おたまじゃくしの　ときより　小さく　なったのです。

色は　まっくろで、手あしが　四本、ほそいのが　ついています。ぴょん　ぴょん　とびます。手の　上に　のせると　じいっと　して　いますが、ゆびで　おすと　とびます。

六　かえるの　なく　ころ

むぎばたけ

むぎ　いっぱい　はえて　いるね。
つばなも　もう　しげったね。
くわの　はっぱが　まっさおだね。
もう　きっと　どじょうも　でたね。

かいこ

学校から　もどると
だれも　いなかった。
かいこが　シャア　シャア
くわを　たべて　いた。

かえる

うまやの　中には、子うまが　おかあさんうまと　ねむ"って　いました。

うしごやには、子うしが　やすんで　いました。

たんぼの　かえるは　にぎやかに　うたいました。

げっこ、げっこ、げろ。

げっこ、げっこ、げろ。

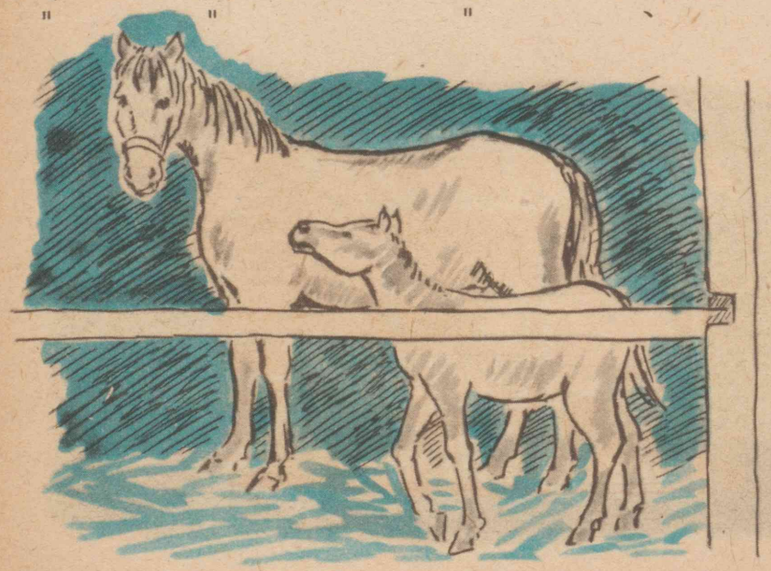
うまやの　中で、子うまが　そっと　目を　あけました。

「おかあさん、かえるの　うたは　うるさいね。」

「ひひーん。しずかに　おやすみ、ぼうや。あしたは　しろかきと　いって、たんぼの　中の　おそ"うじだよ。かえるが　びっくりして　にげて　いくよ。」

子うまは、それを　きくと　よ"ろこんで、

「おかあさん、ぼうやも　つれて"



ってね。」

「ひひーん。ぼうやは　たんぼの
そばで、かえると　おあそび。」
おかあさんうまは　しずかに
いいました。
うしごやでも、子うしが　そっ"
と　いいました。
「おかあさん、かえるの　うたは
やかましいね。」
「もう、もう。早く　やすもうよ。

あしたは　たんぼの　しろかきで、おかあさんは　どろ"
んこに　なって　はたらくのだよ。」
「おもしろいな。かえるが　きっと　おどろくね。」
そこへ、ほたるが　とんで　きました。

七　ごちそうさま

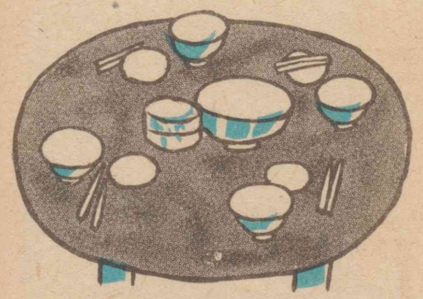
「ごちそうさま。」

「にいさん、にいさんは　いま、『ごちそうさま』って　だれに　いったの。」

「だれって、きまって　いるじゃ"ないか。」

「じゃあ、だれなの。」

「おとうさんさ。」



「おかあさんには　いわないの。」

「そりゃあ　おかあさんにも　い"うよ。——みよちゃんは。」

「わたしも　そうだけど、　でも　なんだか　へんね。」

「どうして。」

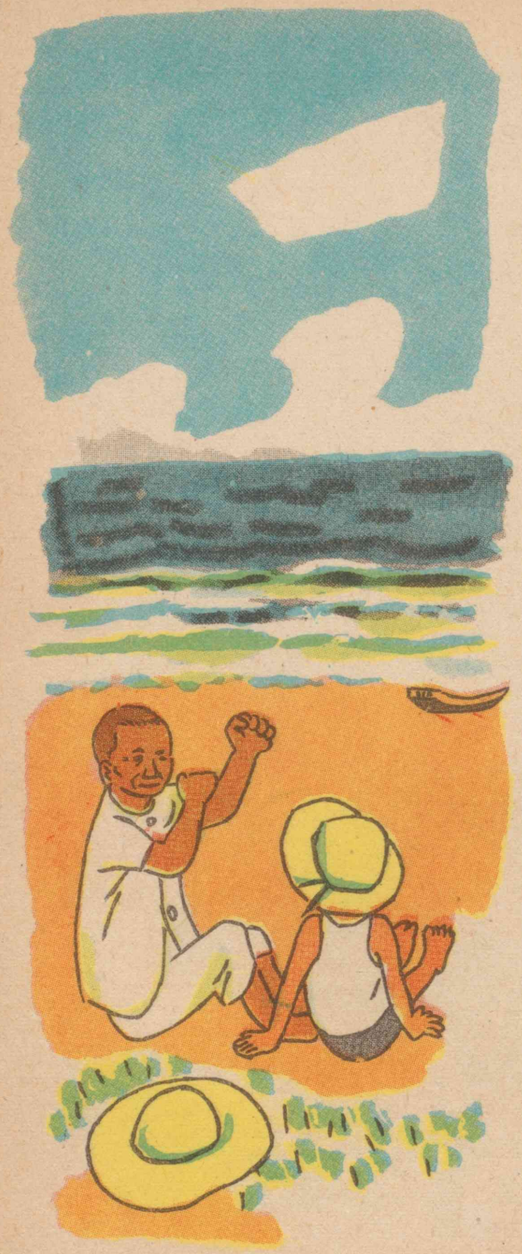
「だって、おとうさんも、『ごちそうさま』って　おっしゃる"でしょう。おとうさんは　だれに　おっしゃるのかしら。」

○この　つづきを　かんがえて　みましょう。

八　かつおつり

父よ
おいらも　いきてえな。
大きな　海の　まんなかで、
おいらも　かつおが　つって　みてえな。
おいらも　ふねに　のりてえな。

まってろ
まってろ、
その　うでが　かしの木のように　なるまで。



九　ゆめ

わたくしが　ゆうべ　ねて　いたら、三びきの　白うさぎが　かけてきて、

「いま、むこうから　おおかみが　おっかけて　きますから、早く　どこかへ　かくして　ください。」

と　いいました。

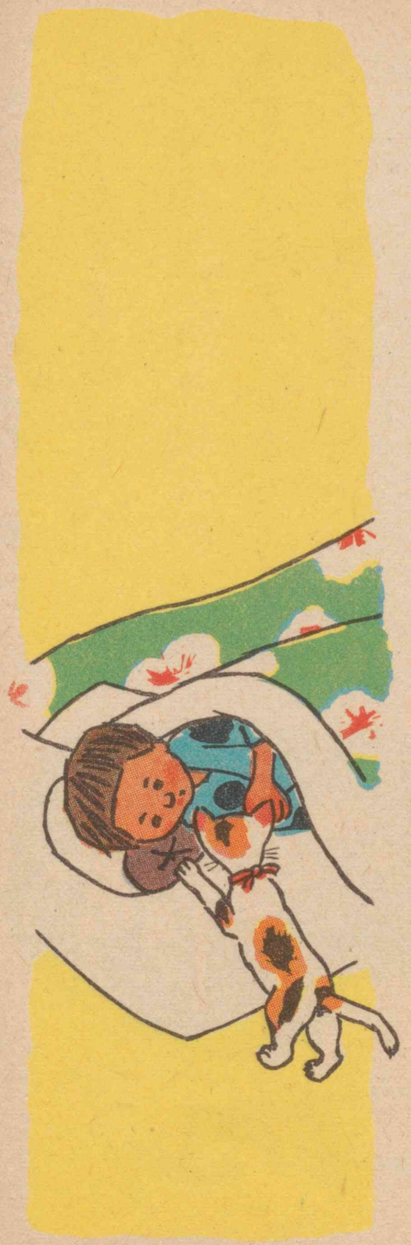
わたくしは　かわいそうに　思って、一ぴきを　わたくしの　ねどこに　いれ、一ぴきは　とだなに　いれ、もう

一ぴきは　おふろばの　中へ　いれて　やりました。

そうすると　まもなく、おおかみが　きばを　むきだして　やって　きました。

これでは、わたくしが　たべられるに　ちがいないと　思って、かくればしょを　さがしたが、とだなは　一ぱいだし、おふろばに　はいろうと　したら、とが　あかないので、ま

たほかの　ところを　さがして　いる　うちに、とうと"
う　おおかみの　つめで　ひっかかれました。
「あっ。」
と　思って　目を　さますと、まくらもとに　みけが　い"
て、わたくしの　けに　じゃれて　いました。



十　おるすい

きのう、わたくしが　学校から　かえって　みると、戸"
が　たって　いて　だれも　いませんでした。
きっと　たんぼに　いったのだなと　思いました。
いつも　わたくしが　かえって　くると、おを　ふって
とびついて　くる　犬の　くろまでが、きょうは　みえま"
せんでした。
どうか　したのかなと　しんぱいに　なって、

「くろ、くろ。」

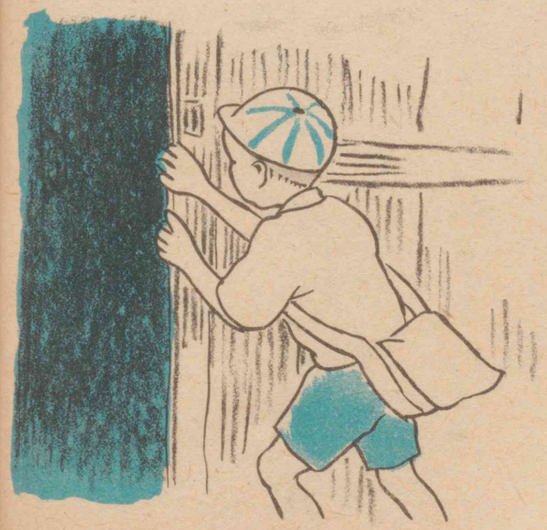
と よんで みたが、やっぱり でて きません。

「それじゃ、くろも さびしくて いったのかな。ひとり ぼっちに なって しまった。」

と 思いました。

「ごろ ごろ。」と いう 戸を あける 音で、いままで おかっぱ てで あばれて いた ねずみが、おどろいて にげだしました。

わたくしは、びっくりして と



びあがりました。

「あ、おっかないなあ。」と びくびく しながら、家の中に はいって いくと、あがりぐちに 白い ましかく な 紙が おいて ありました。

なんだろうかと ふしぎに おもって 手に とって みると、大きな 字で、

「みのるや、もどってきたら、ごはんを たべ、しゅくだいが あったら やって おきなさい。ねえさんが くるまで、おるすいを して いること。 父より。」

と かいて ありました。

「やっぱり　思った　とおりだ。うんと　いそがしいので、みんなで　たんぼに　いったんだな。それなら、あそび"に　いかないで　おるすい　して　やろう。ぬすとでもきたら　たいへんだから。」

それで　ごはんを　たべ、家の中では　おっかないので、戸ぐち"の　すずしい　ところに　むしろ"を　しいて、さんすうと　こくご"の　しゅくだいを　やりました。

やぶかが　きて、ときどき　足"

に　くっつくので、カかぎりに　たたくと　まっかに　手"の　あとが　つきます。

しゅくだいを　やって　しまったので、あそびに　いき"たく　なりました。家の　中に　はいると、さっきの　紙"が　あったので、

「あ、そうそう　あそびに　いっては　いけない。」

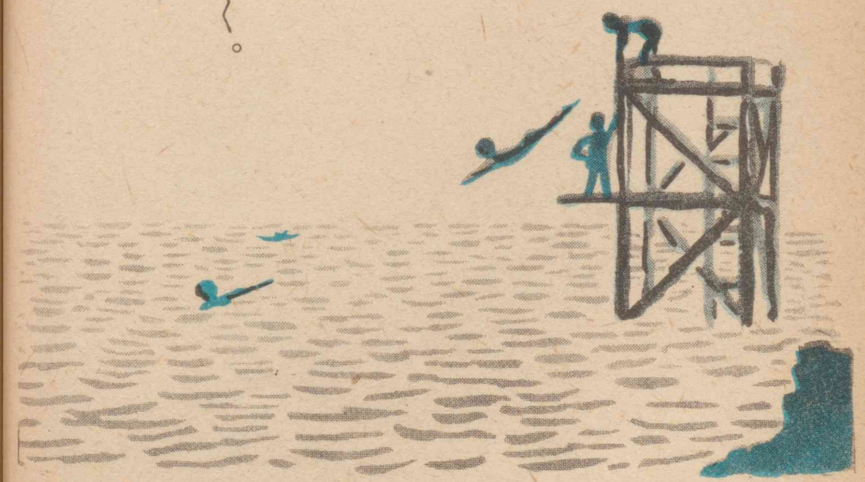
と　思って　やめました。こんどは　うらの　びわの　木に　のぼって　あそびました。

まもなく、ねえさんが　かえって　くるのが　むこうにみえたとき、わたくしは　とても　うれしく　思いました。

十一　みずあび

ぬきて

とびこみだいから　とびこんで、
だれだ　ぬきてを　きったのは、
ああ、あの　ひとだ　およいでく。



あかい　ぼうしを　かぶってる。
あれは　にいさんの　おともだち、
ああ、いきたいな　あそこまで。

にいさんは　おいでと　よんでるが、
かなづちぐみだよ　ぼくたちは、
ぶくぶく　もぐっちゃ　また　およぐ。

みずあび

どてん、どてん、
みずを　あびる。

かわの　ひろい　ところへ
のりだして　いく。

くるっと　あおむけに　なると、
あおい　そらが　みえた。

しろい　くもが
ゆっくり
うごいて　いた。

十二　しゃしんかんへ　いった　虫たち

つゆが　おわって、からりと　した　天きに　なりました。はやしの　中の　虫たちは、はねを　ひろげて　ほしたり、からだを　こすったり、とんで　みたり　して、大よろこびでした。

「やあ、みなさん　こんにちは。けっこうな　お天きに　なりました。」

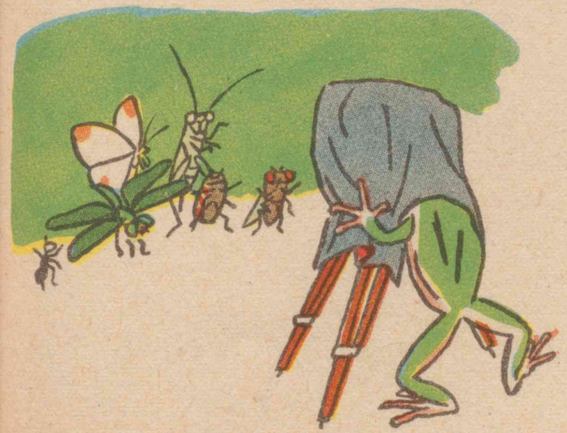
と、一ぴきの　雨がえるが　やって　きました。そして

「わたくしは　こんど　しゃしんかんを　ひらきました。きょうは　かいてんいわいです。ただで　しゃしんを　おとり　します。どうぞ、みなさん　おそろいで　いらして　ください。」

と　いいました。雨がえるが　かえってから、虫たちは　きねんしゃしんを　とって　もらおうと　そうだんを　しました。

とんだり、あるいたり、虫たちは、大さわぎを　して、雨がえるの　しゃしんかんへ　いきました。

「みなさん、おそろいで　よく　いらっしゃいました。
さあ、どうぞ。」
と、雨がえるは　にこにこして、虫たちを　あんないしました。
「では、大きい　かたは　うしろへ、
小さい　かたは　まえへ　ならんで　いただきます。
はい、もう　ちょっと　右へ　お　よりください。そうそう、さあ
うつします。よろしゅう　ございます。」

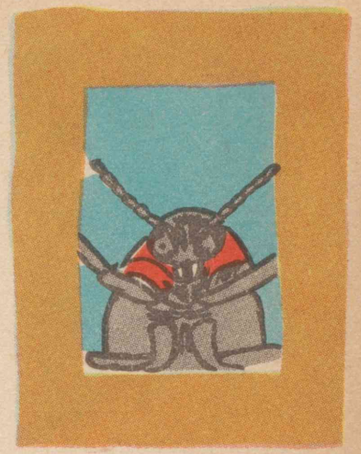


ますか。そらっ、ぱちり。はい、おまちどうさまでした。」
と、雨がえるは　りょう手を　ひろげて　おじぎを　しました。

それから　三日たちました。
「はい　こんにちわ。きねんしゃしんが　できました。
ごらん　ください　な。」
と、雨がえるが　もって　きました。
虫たちは、がやがや、わあわあ、大よろこびで　あつまりました。

「どれどれ、早く　みせて。」
「そんなに　おしては　だめだよ。」
「まえの　ものは　ひくく　なって　おくれよ。」
と、虫たちは　しゃしんを　かこんで、大さわぎを　しました。しばらく　して、
「ぼくは　どこに　いるの。さがして。」
と、かめのこてんとう虫が　いいました。
「これは　ぼくらしいけど、かおが　小さくて　はっきりしないや。」
と、おはぐろとんぼが　いいました。

雨がえるは　ポンと　手を　うって、
「では　みなさんの　おかおだけ　大きく　ひきのばして　さしあげましょう。きっと　おもしろい　しゃしんが　できるでしょうよ。」
と　いいました。
それから　また　二三日　たちました。
雨がえるは、
「えへん、おほん。」
と、とくいがおで　しゃしんを　もって　きました。



虫たちは　おまつりの　ように　はしゃいで、ひきのば"した　しゃしんを　とりかこみました。

「ぎょっ。」

「ぶるるっ。」

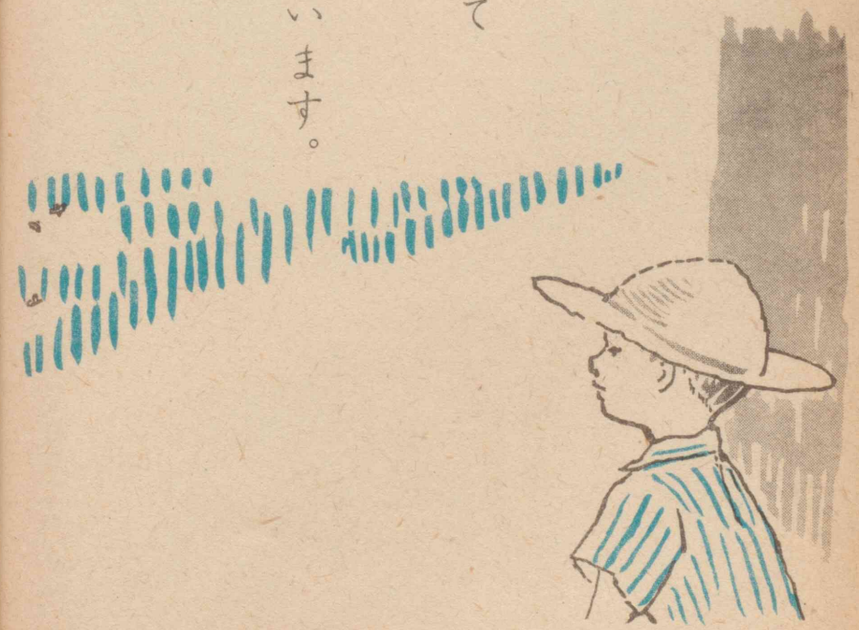
「おやっ。」

虫たちは、じぶんの　かおを　みて、ぷんぷん　おこっ"たり、がっかりしたり、たいへんな　ことに　なって　し"まいました。

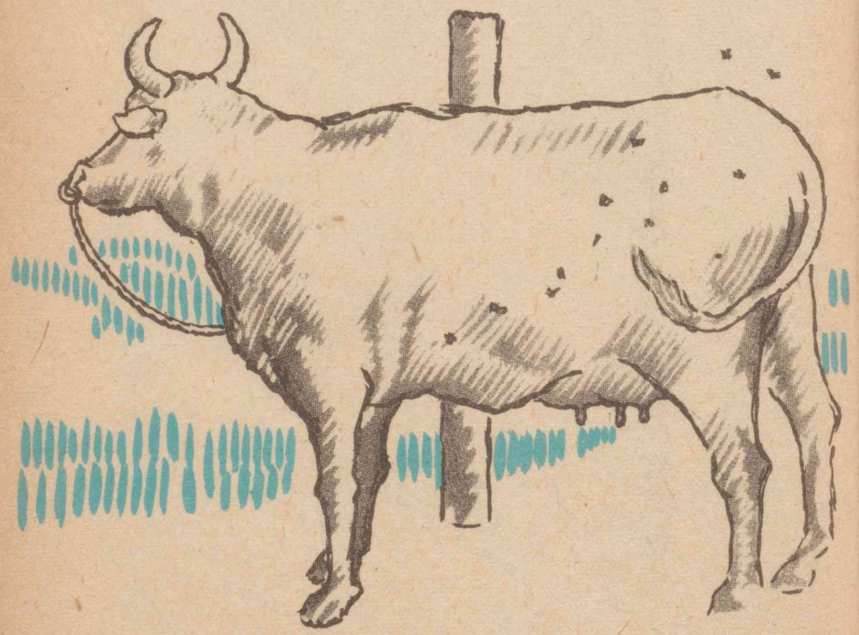
雨がえるは、そのばん　こっそりと　ひっこして　いき"ました。

十三　うし

うしが　でて　います。
うし　つなぎに　つながれて
じっと　して　います。
はいが　たくさん　きて　います。
しっぽだけを
べたりん　べたりん
うごかして　います。



きもちが　わるいような
かおです。
それでも　うごきません。
つのが　にゅうっと
つよそうに
二本　でて　います。



十四　水でっぽう

こうさくの　じかんに　水でっぽうの　おはなしが　あ"りました。ぼくは　うれしくて　ぴょんぴょん　とんで　かえりました。

かえると　すぐ　水でっぽうを　つくる　したくを　し"ました。おかあさんから　ふるい　きれを　いただいて、ぼうに　まきつけました。

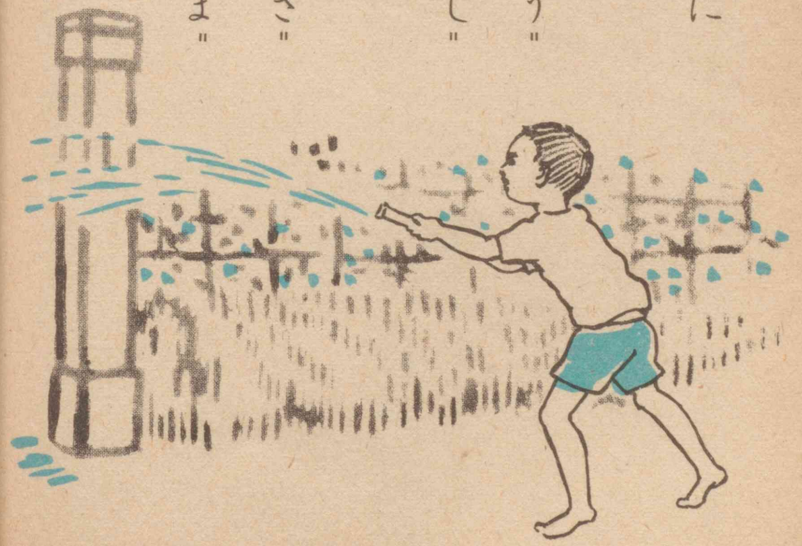
ふとかったり　ゆるかったり　して、なかなか　うまく

できませんでした。やっと　でき"ました。うちには　いけが　ないので、たらいに　いどの　水を　くんで、ためして　みました。

よく　でました。高く　あげると　やねの上まで　とびます。そうして　雨のように　ふって　きます。

おもしろくて　たまらないので、みちを　とおる　人に　かける　ま"ねを　しました。

すると、そこを　女の　生徒が
とおりかかって、うらやましそうに
みていました。
それから、げんかんに　水を　う"
ったり、門に　水を　かけたり　し"
ました。
こんどは　にわの　すみに　くさ"
を　うえて、それに　水を　やりま"
した。



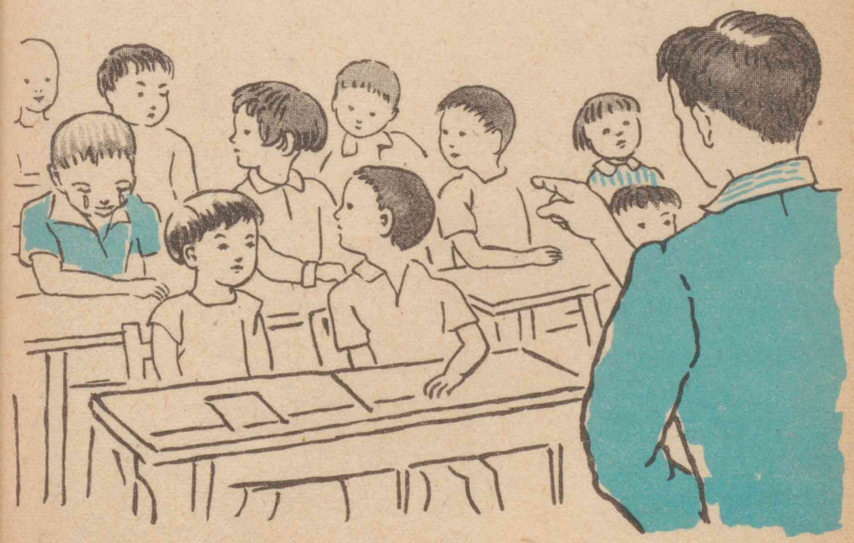
十五　そうだん

きょう　一じかんめの　しゃかいの　ときに、川なべく"
んから　そうだんが　でました。
「さっき　中村くんが　ぼくの　ところへ　きて、『みんな"
が　ぼくを　なかまに　いれて　くれないが、どうして
だろう。』と　ききに　きたんですけれど、みんなは　ど"
うして　中村くんを　きらうんですか。」
と　きいたのが　はじまりです。

先生は、
「みんなが　思って　いる　ことを、ゆっくり　はなしあって　みましょう。」
と　おっしゃいました。中村くんは、
「ぼくが　田中くんの　うちへ　あそびに　いったら、『また　あとで。』と　いって　あそんで　くれないし、やす田さんの　ところへ　いっても、『また　あとで。』と　いって　おくへ　ひっこんで　しまうし、ぼくが　いくと、みんな　にげて　しまって、――なぜなの。」
と　ききました。

けれども　みんなは　だまって　いました。ぼくも　いえませんでした。
「なぜなの、先生も　その　わけを　ききたいね。」
と　おっしゃったので、みんな「だって。」「だって。」とだけで　なかなか　いいませんでした。
「だって　どうしたの。その　さきを　いって　ごらん。」
やっと　西川さんが、
「あのね、中村さんは　いたずらだから、みんなが　あそばないように　しましょうって　いったんですよ。」
と　いうと、ほかの　ものも、

「そうですよ。だって　中村くん
んは、女の子を　いじめたり
なんか　して、いくら　とめ
ても　きかないんですよ。」
「それからね、本を　かして
あげても、なかなか　かえさ
ないんですもの。」
と　いい　だしました。ぼくも、
「だから、中村くんが　あそび
に　きたら、また　あとでと



いおうと、みんなで　やくそく　したんです。」
と　いいました。そこで　先生が、
「中村くん、きみは　どう。」
と　おききに　なりました。中村くんは、だまって　なき
だして　しまいました。川なべくんが　よこから、
「きみ、いけないって　いわれた　とき、こんどから　よ
した　ほうが　いいよ。そうすりゃ　みんなが　なかま
に　いれて　あそぶからね。」
と　いいました。
先生は、

「そんな　そうだんを　きめる　ときは、こんどから　先生も　なかまに　いれて　くださいね。」

と　おっしゃいました。みんなは、

「はい。」

と　いいました。

中村くんには、

「また　あとで、先生と　よく　おはなし　しましょう。」

と　おっしゃいました。

十六　わしの　はなし

海から　とおく　はなれた、大きな　道の　そばの　木の　上に、わしが　すを　つくりました。

そして　こどもを　かえしました。

あるとき、きんじょの　人たちが、その　木の　そばで、道の　わるい　ところを　なおして　いました。

その　とき、わしが　大きな　魚を　くわえて　すの方へ　とんで　きました。

みんなは　魚を　みて　木の　まわりに　あつまり、大きな　声を　たてたり、わしに　ぼうや　石を　なげつけたり　しました。わしは　口に　くわえて　いた　魚を　おとしました。みんなは　魚を　ひろいあげて　いって　しまいました。

わしは　すの　はしの　ところへ　とまりました。子わ

したちが、あたまを　もちあげて　なきたてました。えさが　ほしいのです。

おかあさんわしは　つかれて　いました。もう　一ぺん海まで　とんで　いく　ことが　できませんでした。

すの　中へ　はいって　子わしたちを、つばさの　下へ、いれて　かわいがりました。

「もう　しばらく　がまんを　して、まって　おくれ。」
と　たのむように、子わしの　はねを　くちばしで　なで
て　やりました。
おかあさんわしが　かわいがれば　かわいがるほど、子
わしたちは　大きな　声で　なきたてました。
その　とき　おかあさんわしは、子わしの　ところから
木の　てっぺんへ　とびあがりました。

子わしたちは、いよいよ　かなしそうに　なきたてました。
すると　おかあさんわしは、きゅうに　ひとこえ　つよく　さけび声を　たて、大きな　つばさを　おもたそうに　ひろげて、海の　方へ　とんで　いきました。
おかあさんわしは、ゆうがた　おそく　かえって　きました。しずかに、地めんと　すれすれに　ひくく　とんできました。おかあさんわしは、また　大きな　魚を　くわえて　いました。
わしは、木の　ちかくまで　とんで　きた　とき、また　ちかい　ところに　にんげんが　いないかと　みまわして

から、いそいで　すの　はしの　ところへ　とまりました。

子わしたちは、あたまを　高く　もちあげ、口を　大きく　あけました。おかあさんわしは、くちばしで　魚を　さいて、子わしたちに　わけて　やりました。

十七　こおろぎ

この　あいだ、ぼくは　早川くんの　うちへ　あそびに　いきました。ちかくの　はらっぱで　とんぼとりを　しました。ふたりで　くさの　中を　ふんで　いたら、えんまこおろぎが　ぴょんと　とびだしたので、ぼくが、

「やっ　えんま、つかめ。」

と　いうと、早川くんは、

「えいっ。」

と、あみで　ふせて　とりました。

「しみずくん、あの　びん　もって　き"て。」

と　いったので、とんぼを　いれる　び"んを　もって　いって　あげました。い"れたら、びんの　そこを　くるくる　ま"わって　いました。くさも　すこし　い"れて　やりました。それから　こおろぎ"とりを　しました。

ふたりで　しばくさの　はえて　いる

方へ　いくと、えんまこおろぎが　たくさん　とんで　い"ました。ぼくが、

「いた。」

と　いったら、早川くんは、

「どこだ、どこだ。ぼく　とるぞ。」

と　いって　きました。ぼくは、

「とられちゃ　たいへんだ。」

と　いいながら、とろうと　したら、どこかへ　にげて　しまいました。また　いたので、ふたりで　とろうと　し"たら、これも　よこから　にげて　いって　しまいました。

すこし　たってから、早川くんが、

「とったぞ。」

と　いって、みせに　きました。みると
手の　中に　えんまこおろぎが　一ぴき
いました。みせてから、早川くんは　び"
んに　いれました。

「とったぞ。」

と、また　声が　しました。それで、ぼ"
くも　まけては　いられないと　思って、一しょうけんめ"
いに　さがしました。やっと　一ぴき　つかまえました。

すみの　方で　また　一ぴき　つかまえました。早川くん"
は、四ひき　つかまえました。

早川くんの　うちへ　いったら、もう　三じはんだった"
ので　さよならを　しました。

かえってから　なすを　水で　しめし、小さく　切って
いれて　やったら、おいしそうに　すぱすぱ　つゆを　す"
って　いました。二ひきは　すって　しまうと、くさの
中へ　もぐったり　でたり　して、おいかけっこを　して
いるようです。それから　つるつるする　ガラスに　しが"

みつき、のぼろう　のぼろうと　して　いる　ようすに、ぼくは　すっかり　かんしん　して　しまいました。

夜に　なって、にっきを　かいて　いると、バタッと　音が　しました。みると、えんまこおろぎの　すこし　大きいのが、たたみの　上に　じっと　して　います。これも　つかまえて、びんの　中へ　いれたら、すぐ　なかよしに　なり、大きいのの　せなかに　小さいのが　のったり　して、ゆかいそうに　あそんで　いました。その　うちに、大きいのが、くさを　一つずつ　くわえては、いろいろに　つみかさねはじめたので、

「おや、なにを　するのかな。」

と　思って　みて　いると、小さいのも　一しょうけんめいに　やりだしました。そうして、その　夜は、なにが　できるか　わかりませんでした。

あさに　なって　みると、くさで　りっぱな　すが　できあがって　いました。そうして、三びきは　じゆうに　でたり　はいったり　して　いました。

学校から　かえって　びんを　みると　一ぴきは　すの中で　ねむって　いました。いちばん　大きいのは　なすに　かぶりついて　いて、もう　一ぴきは　あちこち　あるきまわって　いました。

べんきょうしてから　じっと　みて　いると、ねむって　いたのが　目を　さまして、さかのぼりの　けいこを　はじめました。すべっては　やり、すべっては　やり　して、とうとう　すこし　のぼれるように　なりました。

こんどは、また　三びきで　すを　作りなおして、その中へ　はいって　しまいました。

きのう、なすを　かえて　やって、学校へ　いきました。かえって　みると、びんの　そこで、三びきとも　おはなしでも　して　いるように、あたまを　くっつけて　いました。ぼくが、

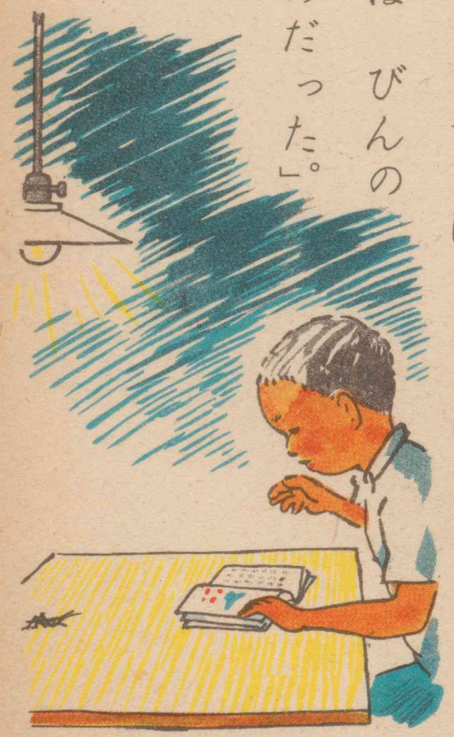
「りーっ、りーっ。」

と、えんまこおろぎの　なき声の　まねを　したら、きゅうに　三びきとも　でて　きて、ぼくの　かおに　とびつ

こうと　しました。ぼくは　びっくりしました。

きょう、学校から　かえったら、おかあさんが
「小さい　こおろぎが　一ぴき　くいころされましたよ。
きょう、くさを　かえて　やろうと　したら、一ぴき
いないので、よく　しらべたら、びんの　中に、足が
二本と　はねが　二まい　のこって　いたのよ。」
と　おっしゃいました。
ぼくは　かわいそうに　思って、また　びんの　中を
のぞきました。やっぱり　二ひきしか　いませんでした。

夜、ごはんを　すませてから、本を　よんで　いると、
どこからか　一ぴきの　えんまこおろぎが　とんで　きま
した。とろうと　したら、にげて　しまいました。あとで
びんの　中を　みたら、一ぴきしか　いませんでした。い
くら　さがしても　一ぴきです。ぼくは　はじめて、
「さっきの　こおろぎは　びんの
中から　にげだしたのだった。」
と、きが　つきました。



十八　いろはがるた

いちろうくんは　いろはがるたを　つくりました。

い　いつも　にこにこ　げんきな　こども

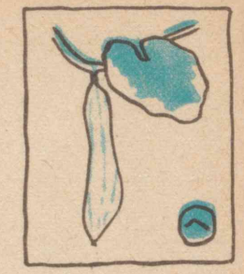
ろ　ろばたで　おばあさんの　おはなし

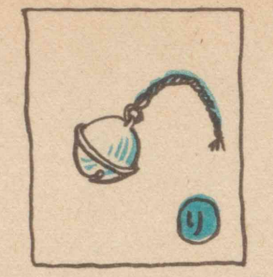
は　はちに　さされて　いたい　いたい

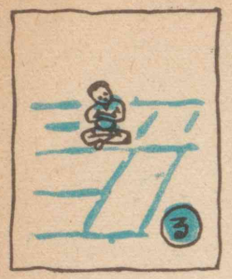
に　にいさんの　ふくは　大きいな

ほ　ホームラン、わっしょい　わっしょい

へ　ちと　りぬる　を　わ







へちま　ぶら　ぶら　ぶーらんこ

とんぼの　めだま　くるり　くるり

小さな　おてて　赤ちゃんの　手

りんりん　りんりん　すずが　なる

ぬるぬる　する　うなぎ

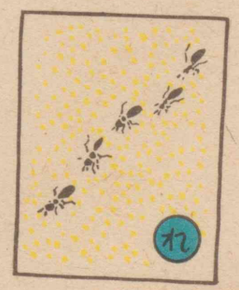
るすばん　たいくつ

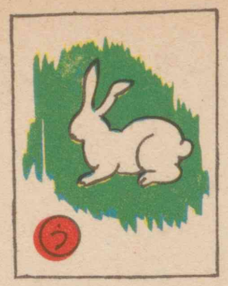
「を」の　字は、ことばの　あとに　つく　字です。

わっしょい　わっしょい　おまつりだ

まさおくんは　どうぶつがるたを　つくりました。

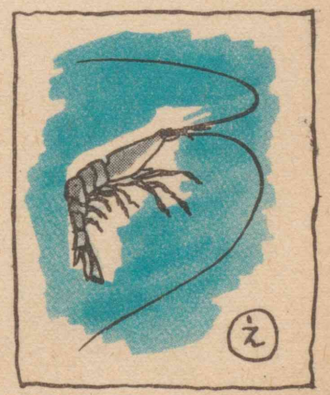
か　かあ　かあ　からす　どこへ　いく
よ　夜　なく　ふくろう
た　たんぼの　いなご
れ　れつを　つくって　ありの　ひっこし
そ　そりを　ひく　馬の　すず
つ　つばめは　南の國から　やってくる
ね　ねずみの　そうだん　すず　つけろ
な　なめくじ　のろのろ　なにぬねの





ら　らくだの　せなかに　こぶが　ある
む　むく　むく　もぐら　土の　中
う　うさぎの　耳は　なぜ　長い
み　「み」の　字は　つかいません。
の　のろのろ　のろまの　かたつむり
お　大きな　くじらの　はらの　中
く　くまと　おすもう　きんたろう
や　やまあらしの　とげは　なん本
ま　まりの　すきな　こねこ
け　けむしは　ちょうに　なる

ふ　ふぐの　ちょうちん
こ　こいぬが　よちよち　あるく
え　えびは　ぴんぴん　はねる
て　手の　長い　てながざる



としこさんは、おはなしの　かるたを　つくりました。
みなさんは　この　おはなしを　しって　いますか。

あ　赤ずきんは　もりの　中で　花を　つむ
さ　さいた　さいた　かれ木に　花が

き　切った　竹から　かぐやひめ
ゆ　ゆめだったのか　たまてばこ
め　めを　だせ　めを　だせ　かきの　たね
み　みつからないよ　青い鳥
し　したきりすずめの　おやどは　どこだ
ゑ　「ゑ」の　字は　つかいません。
ひ　ひとりで　さびしい　ロビンソン
も　もしもし　かめよ　かめさんよ
せ　せいの　ひくい　一すんぼうし
す　すっかり　なかよし　こびとと　ガリバー

十九　雨

「なんだ、雨か。つまらないなあ。」

「やれやれ、やっと　ふって　くれたか。」

「きょうは　はずれたね。」

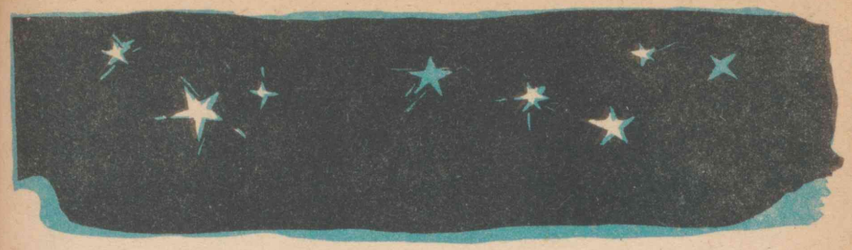
「あらあら、うれしそうね。」

「てるてるぼうず　てるぼうず、
あした　天きに　して　おくれ。」

「あしたは　きっと　だいじょうぶよ。」

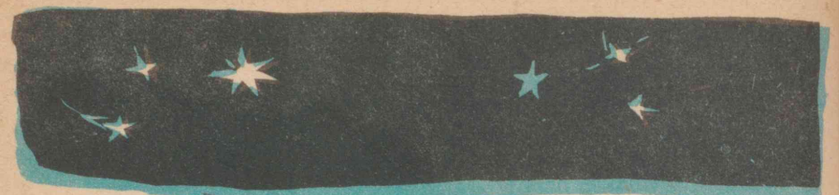
○だれが　いったのでしょう。

○なぜ　いったのでしょう。



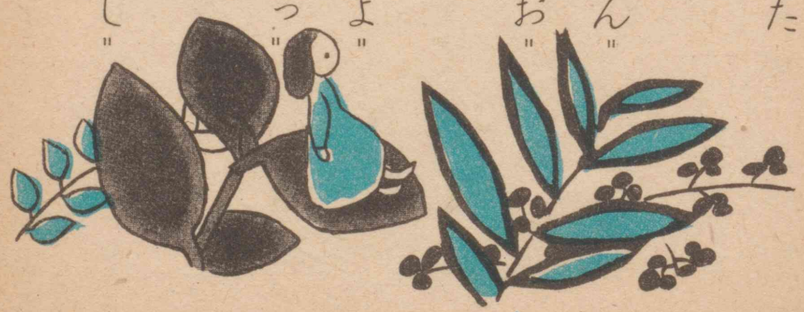
二十　どうして　お空へ

一つぶの　つゆが、はっぱの　上に　やど"って　おりました。つゆは、ちょうど　のぼ"った　月の　光に　てらされて、きららきら"らと　かがやいて、それはそれは　うつくし"ゅう　ございました。くさむらの　くさたち"も、「まあ、あの　つゆさんは　おほしさま"ように　光って　いるのね」。



と　ささやきましたから、ほめられた　つゆは　うれしく　なって、思わず　お空を　みあげました。空には、ちん"くるちんくると、なん千なん万の　お"ほしさまが、たのしそうに　光って　いました。つゆは、その　なかの　よ"い　ありさまを　うらやましく　思っ"て、

「おほしさま、おほしさま。わたくし"も　お空へ　いきたいわ」。



と　もうしました。すると、
「おや、あなたは　しらなかったの。あなたも　きっと
いつかは　ここへ　くる　ことが　できますよ。」
と、おほしさまたちの　中の　だれかが、やさしい　声で
こたえて　くれました。
「まあ、お空へ　いけるんですって。ほんとうでしょうか。
どうしたら　いけるのでしょうか。」
つゆが、うれしくて　うれしくて　たまらない　声で　た"
ずねますと、おほしさまは、
「それは　かみさまが、あなたを　もう　きても　よいと

およびに　なった　ときですよ。」
と、すきとおった　しずかな　声で、はなして　ください"
ました。
「でも、あの　高い　空へ、——どう　やって　小さい　わ"
たくしが　いけるのでしょう。ちょうちょうみたいな
はねを、かみさまが　くださるのかしら——。いいえ、
いいえ、そんな　はずは　ないわ。」
などと、つゆは　いろいろ　かんがえて　みました。そし"
て、しまいに　高い　お空へ　むかって、力　一ぱい　手"
を　のばして　せのび　して　みましたが、お空は　高く"

て とどきません。ぴょんと 一つ 思いきって とび上って みましたが、まだまだ お空は とおいのです。

この とき、さわさわと くさむらを ゆるがせて、きゅうに ふいてきた つよい 風に はっぱを ゆすぶられて、小さい つゆは、石ころの おおい じめんの 上に おちて しまいました。

「たいへんです、たいへんです。わたくしは お空へいくのです。ころがりおちては こまります。たすけてください。」

と、つゆは びっくりして さけびました。すると、

「わっはっはっ。」

と、大きな わらい声が しました。

「ええっ、空へ いくんだって。とんでもない ことをいう。水たまさん。おまえさんは これから ひくい方へ ひくい 方へ いくんだよ。」

と、いじわるそうに いったのは、足もとの きたならしい 石っころでした。

「いいえ、いいえ。おほしさまが おっしゃったのです。

わたくしは　お空へ　いけるのです。」
ところが、石ころが　ちょっと　からだを　うごかしま"
すと、つゆは、また　ころころりと　ひくい　方へ　こ"
ろげおちて　いきました。そして、だんだん　下の　方へ
下の　方へと、ひきずられるように　走りだして　しまい"
ました。
「ああ、お空とは　とおく　なる。たいへんです、たいへ"・
んです。」
と、つゆが　さけびつづけて　いく　うちに、あっちから
ころころ、こっちから　ころころ、なかまの　つゆが　こ"

ろげでて　きて、おしたり　おされたり、とうとう　みん"
な　一しょに、小さな　みぞの　中へ　おちこんで　しま"
いました。チョロチョロ　はなしあって、
なかまと　一しょに　走って　いく　あ"
いだに、夜が　あけました。
「あの　おほしさまたちは　どこへ　い"
らっしゃったのかしら。わたくしは
どこへ　いくのかしら。」
つゆは　かなしく　思いながら　走って　いく　うちに、
やがて　サラサラと　音を　たてる　小川に　でました。

きじべの　かわいい　赤まんまや、ついつい　まっすぐな　かやの　中には、ばったや　いなごが　たくさん　い"て、「こんにちわ。」「こんにちわ。」と　声をかけて　くれるのでしたが、かなしんでいる　つゆの　耳には　はいりませんで"した。

「ああ、おほしさまの　ところへ　いき"たい。」

つゆは　また　ためいきを　つきました。くさむらの　中から　目だまを　むきだした　いぼがえるが、ボチャンと

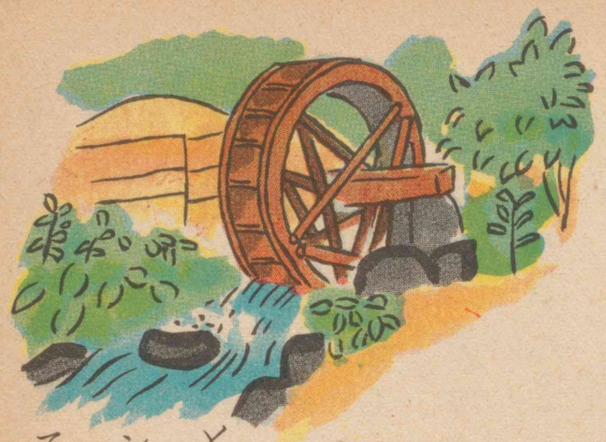
らんぼうに　とびこんで　きましたが、その　声を　きく"と、

「えっ、おほしさまの　ところへ　いきたいって。おまえ"さんたちは　これから　ずんずん　ひくい　ところへ　ながされて　いくんだぜ。わっはっはっ。」

と　いいすてて、また　ぴょんと　きしへ　あがって　い"きました。

こうして、つゆは、下へ　下へと　ながされて　いくば"かりでした。そのうちに、ギイコントン　ギイコントンと　たのしそうに　うたいながら、ゆっくり　ゆっくり　まわ"

って いる ものが ありました。大きな 水車でした。
うまい ことに、その わきに 大きな つきでた いわ"
が あったので、つかれた つゆは その 上に とびの"
ると しばらく 休んで いく ことに しました。
「水車さん、水車さん。あなたは いつも ここで まわ"
りつづけて いるのですか。」
つゆは たずねました。
「ああ、そうだよ。わしは、ここから どこへも いこう"
とは 思わないさ。わしが こうして まわって いる"
とね、みんなが よろこんで くれるのさ。からからに



かわいた たんぼに、わしが 水を よびいれて やる"
と、いねが 水を すって、きゅうに げんきを とり"
もどすのだよ。おひゃくしょうさんも よろこんで く"
れるもの。わしは、みんなが よろこ"
んで くれるのが なにより すきで"
ね。それさえ みれば、どこへ いか"
なくても いいんだよ。」
はなしながら、水車は、ギイコント"
ギイコントンと 休みなく まわっ"
て おりました。

「みんなを　よろこばせるのが　すきだから、水車の　お"じさんは　なんとなく　ゆかいそうなのね。ああ、わた"くしも　これから　ひとを　よろこばせよう。」

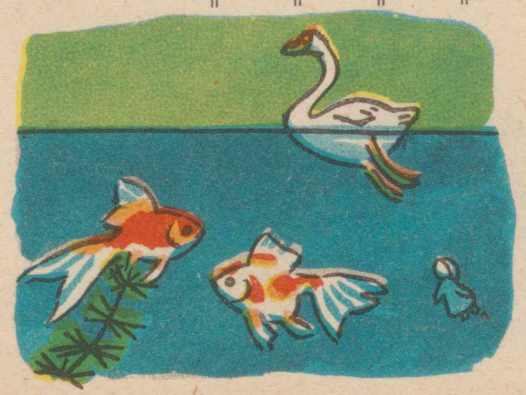
と、つゆが　かんしん　して　いますと、きゅうに　いき"おいよく　よせて　きた　なかまに　おしながされて、あ"っと　いう　まに　いわから　すべりおちて、また　ドウ"ドウと　ながれて　いきました。けれども、つゆは　もう　まえのように　ないては　いませんでした。

「だれを　よろこばせよう、だれを　よろこばせよう。」

つゆは　はればれと　した　声で　うたいながら、ながれ"

て　いきました。

いくじかんも　いくじかんも　いった　とき、つゆは、じぶんの　からだが　ちっとも　うごか"なく　なった　ことに　きが　つきました。大きな　大きな　いけの　中に　な"がれこんで　きたのでした。いけの　中"には、たくさんの　金魚（きんぎょ）が　ひらひら　赤い　ひれを　うごかして　およいでいました。まっ白な　かげを　うつして、すいすいと　す"べるように　およいで　いる　スワンも　いました。みん"



ながら、

「だれを　よろこばせよう、だれを　よろこばせよう。」

と　うたって　いる　つゆの　そばを、うれしそうに　とおって　いきました。

あさに　なると、あたまの　上で　すいれんが　ぽっかりと　目を　さましました。つゆは　なんとなく　うれしくて　なりません　でした。

ある　ゆうがたの　ことでした。

「きょうも　天き。きのうも　天き。あしたも　じょう天きなのでしょう。あれ、ゆうやけで　お空が　まっかです。」

と　いいながら、いけの　中から　みて　いた　つゆは、ふと　からだが　かるく　なったように　思いました。ふわり　ふわり、からだが　いけから　はなれるような　きがしました。

「おや、これは　ふしぎだわ。　わたくしの　からだが　のぼる、のぼる。まあ、いけが　下に　なった。お空へ、お空へ、ああ、わ

たくしは　のぼるのだ。」
つゆは　おどろいて　さけびました。みると、いつのまに
か　じぶんの　からだは　水の　たまでは　なくなって、
けむりのように　かるく　なり、高い　高い　お空を　め
がけて　まっすぐに　のぼっていくのでした。
ゆう日が　しずみました。そして、のぼって　いく　目
の　まえには、いつかの　やさしい　おほしさまたちが、
みんなで　むかえて　くださるでは　ありませんか。
「きましたね。つゆのたまさん。」
「まって　いましたよ。」

おほしさまたちは　にこにこと　して　おっしゃいました。
「ありがとう。やっと　きました。」
あいさつする　つゆの　かおも、いつかの　夜より　ずっ
と　ずっと　まばゆく　光って　おりました。

ア	カ	サ	タ	ナ
イ	キ	シ	チ	ニ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ
エ	ケ	セ	テ	ネ
オ	コ	ソ	ト	ノ

ガ	ザ	ダ	バ	パ	キャ	シャ
ギ	ジ	ヂ	ビ	ピ	キュ	シュ
グ	ズ	ヅ	ブ	プ	キョ	ショ
ゲ	ゼ	デ	ベ	ペ		
ゴ	ゾ	ド	ボ	ポ		

チャ	ニャ	ヒャ	ミャ
チュ	ニュ	ヒュ	ミュ
チョ	ニョ	ヒョ	ミョ

ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
フ	ム	ユ	ル	ウ
ヘ	メ	エ	レ	ヱ
ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

ン

ヒャ	ミャ	リャ	ギャ	ジャ	ヂャ	ビャ
ヒュ	ミュ	リュ	ギュ	ジュ	ヂュ	ビュ
ヒョ	ミョ	リョ	ギョ	ジョ	ヂョ	ビョ

ピャ
ピュ
ピョ

男 (4)　百 (24)　海 (42)　家 (49)　力 (51)　門 (68)　地 (79)　鳥 (97)

石 (15)　思 (28)　戸 (47)　紙 (49)　虫 (56)　西 (71)　夜 (86)　光 (100)

女 (17)　黒 (29)　犬 (47)　字 (49)　右 (58)　道 (75)　作 (89)　千 (101)

切 (20)　早 (38)　音 (48)　父 (49)　徒 (68)　魚 (76)　南 (94)　万 (101)

原作者

「二年生になった日」　徳永壽美子
「春のこども」
えんぴつ　兒童作
さくら　兒童作
じゃんけんぽい　巽聖歌
一年生　兒童作
ポチ　兒童作
「あわてどこや」　北原白秋
「はしらのしるし」　兒童作
「おたまじゃくし」　兒童作
「かえるのなくころ」　兒童作
むぎばたけ　兒童作
かいこ　兒童作
かえる　相良和子
「ごちそうさま」　兒童作

「かつおつり」　山村暮鳥
「ゆめ」　兒童作
「おるす」　兒童作
「みずあび」　巽聖歌
ぬきて　兒童作
みずあび
「しゃしんかんへ」
いった虫たち」　小山内龍
「うし」　兒童作
「水でっぽう」　兒童作
「そうだん」　兒童作
「わしのはなし」　トルストイ
「こおろぎ」　兒童作
「いろはがるた」　兒童作
「雨」　編者
「どうしてお空へ」　高橋節子

以上

Copyright 1948, by
The Nihon Shinkyōiku Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国202

Approved by Ministry of Education
(Date Aug. 10, 1948)

こくご　三

編者
東京都大田区雪ヶ谷町
清明学園初等学校内
財団法人　日本新教育研究会
理事長　濱野重郎
編修長　照井猪一郎

担当執筆者
自由学園初等部主事　佐藤瑞彦
成城学園小学校教諭　馬場正男
盈進学園主事　中村万三
成蹊小学校教諭　佐藤茂
学習院初等科教諭　杉山勝榮
同　松山市造
東洋英和女学院小学部教諭　石澤芳子

表紙とさしえ
中尾彰
齋藤長三

昭和二十三年八月十日印刷
昭和二十三年八月十四日発行

定価　円　銭

著作者　財団法人日本新教育研究会
会長　高橋誠一郎

発行者　学校図書株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者　図書印刷株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行所　学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

（本書の指導書・ワークブック・註釋書並びに、これに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。）

庫
48
584
広島大学図書
010130449584